

## 往生講式研究序説

乾 克 己

### (一) 往生講式の成立と展開

平安時代に作られた講式の中に往生講式一卷がある。作者は『尊卑分脈』に「律師禪林寺、道者名匠、往生講式作者」、『浄土依憑經章疏目錄』に「往生講式一卷永観」、『合類書籍大目錄』に「禪林寺永観述」とみえるように、東山禪林寺中興の祖として知られる永観律師（長元六年～天永二年）である。

成立年代は『往生拾因直談』第六、永観律師伝に「承暦三年六月十日ニ往生講ノ式ヲ著作ス」とあり、『往生講式纂記』に「承暦三年林鐘中旬、著於往生講式」とあるので、承暦三年（永観四十七歳）とみられるが、これとは別に『往生拾因見聞』には「永長元年丙子製作往生講式<sup>六十四</sup>之年也」とあって、異説を伝えている。

往生講式の製作時に起った奇瑞は、『往生講式纂記』によつて知ることができる。同書によると、永観が講式を製作していたある日、高僧が来て雌黄筆を授けて姿を消した。そこで製作の功を終えた永観が誓約をして、「もし作るところの講式が聖意に叶うならば決して焚焼してはならない」と言つて式文を爐中に投じたところ、「禪林春朝。華色自増観念。孤山秋暮。風声纔為知識」の四句を損じたのみで、他の文は自若としていたという。また、『千載集』巻十九、釈教歌には、永観が講式製作の折に詠んだという、「みな人を渡さんと思ふ心こそ極楽にゆくしるべなりけれ」という歌を載せている。

往生講は、式文の表白に「因之迎毎月十五日、修一座七門講」とみえるように、毎日十五日阿弥陀如来像の前で厳修された。また、『拾遺往生伝』巻下、永観の条に、「又新造式、毎十齋日勸修往生講」とみえるように、往生講を修する十五日は十齋日の一つとされた。十齋日とは、一日に定光仏、八日に薬師仏、十四日に普賢菩薩、十五日に阿弥陀如来、十八日に観世音菩薩、二十三日に得大勢至菩薩、二十四日に地藏菩薩、二十八日に毘盧舍那仏、二十九日に薬王菩薩、三十日に釈迦如来を念ずる十の齋日をいう。このうち十五日の阿弥陀講では、妄語をつつしみ、ひたすら阿弥陀仏を念じて十劫の罪をのがれることを願った。<sup>91)</sup>

『兵範記』久安五年十一月十五日の条に「女院阿弥陀講如例」とあり、同書、仁平二年二月十五日の条には「女院十齋阿弥陀講如例」とあり、同年七月十五日の条には「十齋阿弥陀講如例、此外無別御仏事、但丈六九尊供別仏口燈明、入夜女院還御土御門殿」、同じ年の十月十五日の条には「御堂阿弥陀講、次十齋同講」、仁平三年六月十五日の条には「高陽院十齋阿弥陀講如例」とあり、藤原忠実の女である高陽院泰子（立后後勲子）は、丈六九尊を安置する阿弥陀堂で十齋阿弥陀講を修している。なお、仁平二年十月十五日の記事に、阿弥陀講と十齋同講を別個に記述していることからみて、両者は内容上で相違するかと思われるが、その詳細は現在のところ不明である。また、以上の記録にみえる阿弥陀講とは往生講と同じで、前述の『拾遺往生伝』に「新造式、毎十齋日勸修往生講」と記している箇所を、『古今著聞集』巻二、釈教第二「永観律師極樂往生事」では、「又みづから阿弥陀講式を造りて、十齋日ごとに修して、薰修久しく成にけり」と書き改めている。<sup>92)</sup>

前掲の『兵範記』に、阿弥陀講を催した場所として記されている御堂とは、藤原氏の邸宅が営まれた白河の地にある建物を指すようである。『兵範記』仁平二年八月二十八日の条に、「今日禪定大相国於高陽院白河御堂、被奉賀法皇五十御算」とあり、この日藤原忠実は、高陽院の白河御堂の九体阿弥陀像の前で、鳥羽法皇の五十賀を盛大に挙行している。また、同書仁平二年正月十三日の条に、「白河御堂修正也。去暁高陽院予御幸」とあり、同書仁平三年正月十三日の条に、「今夜高陽院白河御堂修正也」とあるように、この御堂では修正会も行われた。また、『師元年中行事』<sup>93)</sup>によると、年号は不明だが、二月上丑日に白河新阿弥陀堂で修二会が行われている。

白河御堂で行われた阿弥陀講の次第を詳細に伝える記録は『兵範記』仁平三年六月十五日の条である。以下その該当記事を示す。

今日於御堂。丈六仏前被始行阿弥陀講。中尊花机仏供二坏。白飯盛仏鉢、坏別三斗、鉢八体不供之、香花燈明皆供九体、如恒当其前。立前机礼盤台等如例。東底正面以北敷高

麗縁畳三枚、為請僧六口座。南上西面、其前立経机、分安法花経一部。在心経阿弥陀経等前机安御経第一卷。式文等永観律師筆式也、正面以南敷間帖。為

上達部座<sup>北</sup>、南庇東二間以西。敷紫縁疊三枚。為上人座<sup>東</sup>。北又庇御所垂御簾。出香染御几帳帷。御堂四面母屋庇懸亘幡花鬘代如

恒。未刻。僧参会。権少僧都相源。権律師寛算。法橋源慶。已講教覧。玄縁。阿闍梨源幸<sup>以上権鈍衣、甲袈裟、源慶、源幸外皆僧供</sup>、次院司頭親朝臣申事由。

次御講始。相源為導師。先御経供養。説経式講了。導師下座。次娑婆界。次布施<sup>(4)</sup>。

右の記事によると、白河御堂で行われた阿弥陀講では、権少僧都相源が導師となり、御経供養、説経に続いて式講があり、永観律師の筆になる式文が読まれた。式講とは、(一)式文を柱として構成された講会、(二)式文を含む講演の次第を述べた本、(三)式文、の三分類のうち、(一)をさすとみられる<sup>(5)</sup>。式講の用語例としては、『兵範記』仁平二年十月十二日の条に、「高陽院被行羅漢供。……有観僧都為導師。御経供養。御誦経。次式講」とあり、同書仁平三年正月二十九日の条には、「已刻参女院十齋釈迦講如例。次有百種供養。中央間立仏台。奉懸三尺釈迦仏一鋪。……相源為導師<sup>宿裝束</sup>・説経了。式講。次布施」とあり、金沢文庫保管、聖宣本「伽陀集」の識語に、「阿闍梨云、式講、伽陀ノ南無ノ字必可唱之」とある。また、前掲の阿弥陀講の記事中に「永観律師筆式也」とあったが、これは律師みづから筆写した講式本なのか、律師が製作した講式本なのか判断に迷うが、後者とみてよいのではなからうか。『兵範記』の記事は、白河御堂で行われた阿弥陀講で永観筆の往生講式の式文が読まれたことを示す興味ふかい例と言えよう。

永観自筆の講式本は今日まで確認されていないが、『醍醐寺聖教目録』八に「往生講私記一卷」という内題の次に、「正本云、南都東大寺、沙門永観草、願共結縁者、往生安楽国、於弥陀仏前、講讀私記文、及十方国中、同以為仏道、／天永三年八月十四日書写畢、／抑講式。彼律師存生之間。筆削不絶。雖然最後臨終之時。以此本被修。此講有其靈瑞。来迎讀時異香満室云々。仍以此云々。可為正本矣。此歌本二来迎讀次二有之。／世乎須天々阿弥陀保等介乎多乃牟美ハ乎波利乎毛不曾字礼之加利毛留／此歌、第七段奥二有之／美奈比等乎和他佐牟登於毛不許々呂故曾極楽爾遊久之留倍奈里毛礼」という奥書を載せている<sup>(6)</sup>。この記事によって、永観没後の翌年にあたる、天永三年八月十四日書写された往生講式が醍醐寺に伝来していたことがわかる。

前掲の白河御堂で行われた往生講のほかには貴族社会ではこの講会がしばしば行われたらしい。『教訓抄』卷十、打物案譜法口伝記録の裏書に、「仁治二年四月二十四日、今出川太政大臣入道殿往生講。打太鼓事」とあり、西園寺公相の邸宅で往生講が行われたことがわかる。『玉葉』治承二年十二月二十三日の条には、「今夕於ニ法皇宮一。被レ行ニ往生講一。毎月十五日可レ為ニ恒例一事云々。大相国已下堪ニ糸管一輩応レ召。」とあり、後白河法皇の御所で往生講が行われた。また『花園天皇宸記』元亨三年五月十五日の条に、「入夜御

後有頃、於御影堂被行阿弥陀講、長講堂衆四人為伽陀衆、一人定并為導師読式、管絃如例」とあり、花園院御所で催された阿弥陀講で式文が読まれ雅楽が奏されている。また正嘉元年成立といわれる『私聚百因縁集』巻八、永観事の条に、「此ノ永観製作往生講、經二年月一俣弥々世間深ニ信仰一。尋ニ所々一貴賤結レ契月々勤レ之。男女合レ便時々即行。或奏ニ伎楽一唱ニ伽陀一。或設ニ供具一備ニ香花一。然信レ之輩最後顯ニ異相一。臨終見ニ花台一。離ニ火界一一生ニ極楽一者。其類正多。耳目及處、誰此不ニ信用一」とあるのは、往生講が貴賤を隔てず広く営まれていたことを証するものである。

## (二) 往生講式の享受の諸相

前項では、永観作の講式本が阿弥陀講(往生講)の折に導師によつて読まれた記録を紹介したが、往生講式(式文)そのものも、流麗かつ典雅な文章のゆえに中世以降の文芸に多大な影響を及ぼした。筆者はかつて「往生講式と仏教歌謡」と題する小考の中で、この講式が中世の和讃や伽陀などの仏教歌謡、宝物集、撰集抄などの説話集に摂取されていることを指摘したことがある<sup>9)</sup>。ここではそれらを含めて往生講式が中世以降の文芸に及ぼした影響の種々相を明らかにしたいと思う。

以下、該当する式文を表白、第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七の段に分けて示し、各段ごとに式文を典拠とする作品を掲出する。(往生講式の本文は魚山叢書所収本に依つたが、返点、送仮名はすべて省略した)

### (一) 表白

△於焉禪林春朝華色自増観念。孤山秋暮風声纔為知識▽

○観念春フカシ、禪林ノ花ココロニソミ、欣求トキイタル、浄土ノ風煙マナコニサイギル(金沢文庫保管「往生講伽陀」惣礼)

○禪林春朝花色自増観念、孤山秋暮風音纔為知識と観給て明し暮し給けり。(延慶本『平家物語』十、五末、時頼入道道念由来事、付永観律師事)

○禪林春朝花色自増観念といふところを、あらしふくはるのはやしのあさぼらはなはつねなき世はしられつつ(「閑月和歌集」第九、釈教歌、前右兵衛督為教女・「新千載集」第九、釈教歌、從二位為子)

○禪林春朝花色自増観念 建保五年 あさなあさなさくと見しまに散はててうき世しらする山桜かな(中院詠草)

(二)第一発菩提心

△人非木石好自発心▽

○南都東大寺禅林の永観律師は、人木石にあらず、このめばおのづからほつしんと申たるなり、はやく道心をこのみ、すみやかに名利をはなすべきなり。(九冊本宝物集)

○人は木石にあざれば、このめば発心するに侍ん。(『撰集抄』巻七、伊勢国山中尼事)

○人木石にあらず、発心せば、などか成仏得脱なからん。(十行古活字本『曾我物語』巻十二、少将法門の事)

○さすが岩木にあざれば、好と好まざるとなり。発心の扉ひらけなば、阿耨菩提も遠からじ(玉林苑「余波」)

○永観律師ノ式二人非木石好自発心スト、此言目出シ。(『雑談集』巻一、十四)

○人木石にあねば、時にとりて、物に感ずるなきにあらず。(『徒然草』四十一段)

△無始以来輪廻六趣……今一念菩提心之宝珠。已繫第八頼耶之衣裏。斯実長夜之明珠。浄土之玄軌也▽

○六趣輪廻ノサト業障クモクラシ、一念菩提ノミチ明珠ツキマトカナリ。(往生講伽陀第一)<sup>(9)</sup>

△或咽焦熱大焦熱之炎。或閉紅蓮大紅蓮之水▽

○自業自得、果のつみまぬがれがたければ、ぼさつにかはりて地獄に落給ふ。ぐれん大ぐれんの氷の下には、億千載慈悲のきもをくだき、焦熱大せうねつのほのほの中には、むりやうごふにんにくのはだへをこがしたまふ。(九冊本宝物集)

○なにをもちてか、焦熱の焰をけち、なにによつてか、紅蓮の水をもとくすべき。(『撰集抄』巻七、伊勢国山中尼事)

○次に夏来れども装束を代る事なければ、焦熱大焦熱の苦の如、又冬来とも、食を重ぬる事なければ、紅蓮大紅蓮の水に閉られたるが如し。(延慶本『平家物語』十二、六之末)

○ある時は、焦熱大焦熱の炎にむせび、ある時は、紅蓮大紅蓮の、水に閉ぢられ、鉄杖頭を碎き、火燥あなうらを焼く。(謡曲、歌占・阿漕・善知鳥・東岸居士)

△或沈餓鬼飢饉之愁。或值畜生残害之悲。人間八苦天上五衰。総輪廻之間受如是苦幾▽

○おほかた生けるものを殺し、いため闘はしめて、遊び楽しまん人は、畜生残害のたぐひなり。(『徒然草』百二十八段)

○王は鴿を哀ませ給て、鷹に語て仰被けるは、汝も鳥類なり、是も鳥類なり、畜生残害の悲しみは何む為む、我に許せとて仰被ける。  
(妙本寺本「曾我物語」卷五)

○されば、地獄の八寒八熱のくるしみ、餓鬼の饑饉のうれへ、畜生残害のおもひ、そのほか、天上の五衰、人間の八苦、ひとつとしてうけずといふ事なく、(十行古活字本「曾我物語」卷十二、少将法門の事)

△何況朝開栄花。暮随無常之風。宵翫朗月。曙隠別離雲。……消北邸露之暮。徒送野外。昇東岱雲之朝。空訪亡室▽

○朝の花をみる人、夕の風にちり、宵の月をながむるもの、暁の雲にかくる。(九冊本宝物集)

○春の朝に華を翫びし人も、夕には北邸の風に散り、秋の夕に月を伴ひし輩も、暁には東岱の雲に隠れぬ。(愚迷発心集)

○宵に朗月にうそむきしたぐひ、暁は東岱の雲にかくれ、朝になづさへし人、夕に無情の風にさそはる。(撰集抄)卷六、林懷僧都発心之事<sup>10)</sup>

○夫れ朝に開くる栄花は、夕の風に散り易く、夕に結ぶ命露は、朝の日に消え易し。(日本古典全集本「元久法語」)

○東岱前後の夕煙、昨日もたなびき今日もたつ、北邸朝暮の草の露、おくれ先たつためし有。(時宗本作和讃、無常讃・「統教訓抄」)

○露ト消ヌルタニハ蓬カ下ニゾ送ケル、靄雲ト昇ニハ、空シキ路ヲゾ行テ問フ。(金沢文庫保管「大要雜抄」付載和讃)

○東岱前後の煙は、山の霞と立のほり、朝市の栄花は忽に、日夕の露をあらそふ。(真曲抄「無常」)

○朝市の栄花盛りにして。(真曲集第五「朝」)

○朝に昵<sup>ムツ</sup>タニナレシヒト、北邸ノツユト消ニケリ。世ヲサルヒトラ数<sup>タタ</sup>フレバ、涙禁ジ難クゾラボユル。昔見シヒトハ東岱ノ煙トコソ登リニケレ。(大原遮那院本「妙音院声明書拔書」所載、教化)

○東岱前後之煙。便是朝昵夕語之輩。北邸新旧之露。寧非遠聞近見之耶。(六道講式<sup>11)</sup>)

△獄卒将去之道。流淚独行。魔王呵責之庭。屈膝孤悲▽

○獄卒のいでさる道には、ひざをかがめてひとり歎き、魔王呵責の詞をば、我ばかりにこそ聞らめ。(撰集抄)卷九、実房御事)

○黄泉孤独之道無下施ニ恩愛一妻子上。炎王呵責之庭有下誠ニ罪業一惡鬼上。(金沢文庫保管「餓鹿因縁」)

○かなしきかなや、閻魔法王の呵責のことは聞。(十行古活字本「曾我物語」卷十一、箱根にて仏事の事)

△再帰三途之故郷。重受惡趣之苦果。不如早厭一生之名利。偏期菩提之妙果▽

○三途ノ古郷ニ帰ツツ、惡趣ノ苦果ヲ重ケル（傍注、ソウケズシテ・受スシテ）。名利ノ家厭出テ（傍注、イ捨テ）、菩提ノ道ニゾ入リヌ（傍注、至ル）可シ（傍注、イタリヌル）。（『大要雜抄』付載和讃）<sup>(12)</sup>

△一華開者天下皆春▽

○一花開者天下皆春、為世朝臣、さきそむるのりのをしへのはなにこそよものこずゑのはるも見えけれ（『閑月和歌集』第九）

○前大納言為家周忌に法眼源承往生講式の心を題にてよませ侍りける歌の中に、一花開者天下皆春といふ事を、前大納言為世、さきそむる法のをしへの花にこそ四方の梢の春もみえけれ（『新千載集』卷九、釈教歌）

### （三）第二懺悔業障

△安樂集引經云。人經一日一夜有八億四千万念。一念起惡得一生惡身。十念發惡受十生惡身。乃至千万億念復爾▽

○第六に、業障をさんげして仏道になるべしと申は、禪林寺の永観が七段の往生講の私記に云がごとし。人一にち一夜をふるに、八億四千の思ひあり、念々になすところ、みな三途の業なりといへり。（九冊本宝物集）

○一日一夜ヲフルホドニ、八億四千ノオモヒアリ、念々ゴトニナストコロ、ミナコレ三途ノ業トナル。（時宗本作和讃、心品讃）<sup>(13)</sup>

○あしたの床を起くるより、枕定むる夕べまで、八万四千の思ひありとかや、それ皆みつのごうぞかし。（唯心房集今様）

○經ニ曰ハク、一人一日ノ中ニハ八億四千ノ念アリ、念々ノ中ニ作ストコロ、皆是三途ノ業ナリト云々（觀心略要集）<sup>(14)</sup>

○おほかたよにある人の一日一夜がうちだにも、つみとなるおもひの、八億四千ありときこゆるに。（隆房集）<sup>(15)</sup>

△悲哉。未來無窮生死出離何時乎▽

○過去ノ流転ハ何為セム、未來無窮ノ生死コソ、出離其期ヲ（傍注、イ・モ）不知身ゾ（傍注、イ・人ソ）、思ヘバ弥ヨ悲ケレ。（『大

要雜抄』付載和讃）

△但業障年深。懺悔日浅。各三業運誠。修事理懺悔。先事懺悔者。五躰投地。遍身流汗。発露涕泣。懺悔罪障也。次理懺悔者。一切業障。皆妄想生。自性空也。自性空故。本不生也。作此觀時。妄想夢覺。生死本無。衆罪露消。輪廻爰絶。<sup>(16)</sup>▽

○五躰ヲ地ニ投ケ礼拝シ、発「露涕泣懺」悔シテ、「一切業障スベテ皆」、空シキ事ヲ悟ル可シ。（『大要雜抄』付載和讃、欠字部分は

出典から推して「」内に示した。以下同じ)

○自性空ノアカツキノカネ、妄想ユメサメヌ、生死界ノアシタノツユ、懺悔ノカゼニキエヌ。(注生講伽陀第二)

○自性空ノ暁ノ鐘ニ、妄想ノ夢サメ、生死界ノ朝ノ露ニ、懺悔ノ罪消ヌ。(金沢文庫保管、鈔阿本伽陀集<sup>(17)</sup>)

○有想のさんげと申は、無始生死よりつくりし罪をくゐて、発露ていきうして、「或ハ本尊ニ向テ礼拝シテ懺悔シ、ミ」、あるいは聖賢にむかつてかたり、さんげするなり。(九冊本宝物集)

○無想のさんげと申は、一切の業障は妄想より生じて、その躰といふものなし。これを観ずるをもて、理のさんげと云なり。(九冊本宝物集)

△但事理懺悔不堪者。一心念弥陀仏。一念之間能滅八十億劫生死之罪。何況念念乎。是故常念弥陀者。恒修懺悔之人也<sup>(18)</sup>▽

○事理ノ懺悔ヲ修ネドモ、弥陀ノ名号唱レバ、一念須「與ノ間」ニモ、無量生死ノ罪消ヘヌ。(『大要雜抄』付載和讃・仏名会法則訓伽陀・時宗本作和讃、滅罪讃)

○禅林寺の永観は、つねに弥陀を念じて名号をとかわるものは、業障をさんげするなりと申て侍るめり。(九冊本宝物集)

○一心に御名を称すれば、念々の中に悉く、八十億劫の罪滅す、この故正に念ずべし。(空也和讃・時宗本作和讃、滅罪讃)

○事理の懺悔は、五体を地に投げて、一心に念仏をとふれば、草木のたききを万里につみみつといへども。(統群書類従本『西行物語』上)

○懺悔業障といふことを、惑ひつつ過ぎけるかたの悔しさに泣く泣く身をぞ今日はうらむる(『山家集』中、雑)

#### (四)第三随喜善根

△適遇仏教。必由宿善。……積善余慶。幸得人身。若如教修行。若如法随喜。現身何不発三昧哉。臨終何不見如来哉▽

○ウケカタキハ人身ナリ、コノミノ宿善ヲシレルトイエドモ、タマタマアエルハ仏教ナリ、ハツラクハ如教ノ修行ノナキコトヲ。(往生講伽陀第三)

△当知彼人非唯二三四五如来所種諸善根。已於無量阿僧祇爾許如来所種諸善根。而獲聞此三昧王名字▽

○げに此世一の宿善によも侍らじ。二三四五の仏のもとにして、多くの功德を植ゑ給へるが、いささかの縁によりて、生ひ出ぬるな



るべし（『撰集抄』卷五第六）

○只二三四五の如来の御もとにうへけん種のみかは、若門此経信樂受持。かたきが中に堅とす。（真曲抄「浄土宗」）

△愚哉。具恒沙宿善之身。被拘一旦名利。又還三途之旧里。更經多百千劫▽

○常樂我浄に誑されて、懲りず三途の故郷に帰りなんとす。愚かなるかや、一旦の名利に酔つて、永く四趣の苦患を受けんことを。

（仮名草子『浮世物語』）

△積善餘慶幸得人身。若如教修行。若如法隨喜。現身何不発三昧哉。臨終何不見如来哉▽

○過去ノ宿善有ケレバ、此度カカル身ヲ得「タリ」、教ノ如ニ修行セバ、「如来ヲ見ルコト難カラズ」。（『大要雜抄』付載和讃・魚山叢

書所収訓伽陀・時宗本作和讃、無常讃）

#### （五）第四念仏往生

△彼極樂中有九品差別。且説下品云。或人具作十惡五逆。臨命終時。遇善知識。具足十念。即得往生。余浄土中未生此等罪人。又弥

陀如来在四十八願。第十八願云。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺云々、余諸仏中。未発如是悲願▽

○悲願世ニコエタリ、引摂ヲ余ノ諸仏ノナカナタクラベガタシ、来迎イツレノユフベゾ、往生ヲ一九品ノアヒダニキラハズ。（往生講

#### 伽陀第四）

○浄土十方ニ多ケレド、罪人生ルル事難シ、仏ハ三世ニマシマセド、カカル悲願ハ未ダナシ「傍注、極樂世界ヲ願フベシ」。（『大要雜

抄』付載和讃・時宗本作和讃、極樂讃末）

△是以非極樂者。何欣浄土。非本願者。誰生極樂▽

○極樂世界ニアラズハ、何ノ浄土ヲネガハマシ、仏ノ悲願ニ乗ゼズハ、イカデカ浄土ニウマルベキ。（鈔阿本伽陀集(15)）

△夫仏果曠海雖是一味。因位悲願弥陀尚勝。一子慈悲雖実平等。摄取光明照念仏者▽

○仏果ノ広海替ラネド、「因」位悲願ハ弥陀「勝レ」、一子ノ慈悲ハ劣ネド、光ハ念仏ノ者ニ指ス。（『大要雜抄』付載和讃・時宗本作

和讃、恩徳讃）

○永観律師の往生講の私記には、一子の慈悲は平等なりといへども、摄取の光明は念仏者を照し給ふと侍るめれば、なをなを一心に

弥陀を念じて、浄土に心をすまし給ふべき也。(九冊本宝物集)

△静思往昔結縁之厚。心念在侍。情思大悲誓願之深。淚連連不留▽

○心ヲ静テ往昔ノ、結縁思ソ憑シキ、大悲ノ誓ノ深コト、思ヘバ涙モ留ラズ。(「大要雜抄」付載和讃)

△阿弥陀発難発之願引摂我等。何我等遇難遇之願不念弥陀。速抛万事一心称念。悲願是深引接何疑。抑一生終有限。長別此界時想像。弥陀如来紫磨黄金之粧嚴與聖衆俱来。黄金色映徹蒼天皆黄。白毫光赫奕国土普明▽

○何弥陀力有難キ、誓ヒ発引摂シ、何我等力逢難、願ニ遇テモ唱ヘザル、早万事ヲ抛チテ、一心ニ弥陀ヲ念スベシ、悲願定テ深レバ、引摂何ヲカ疑ハム、一生終ニ限り有、別ムタヲ思ヤレ、如来紫磨ノ粧ヒニ、恒沙ノ聖衆围绕セリ、黄金ノ色映徹シ、蒼天皆是レ金ネナリ、白毫光曜テ、国土普ク明ケシ。(「大要雜抄」付載和讃・「早ク万事ヲ……疑ハム」空也和讃・時宗本作和讃、極樂讀本)

○設亦人身を受とも、仏法に値んこと尤難し。早く万事を抛て、まさに一心を励すべし。(愚迷発心集)

#### (六)第五讃嘆極樂

△次長別娑婆。初生極樂。其時想像。瑠璃地宝樹行列。影光赫奕。七宝池。蓮華開敷。馨香芬烈。樹下天人聖衆。遊光映華色。池畔鸞雁鴛鴦。囀声和浪音。又宮殿万万。樓閣重重。<sup>(19)</sup>鳳薨連黄金。鸞瓦並瑠璃。宝幢照地。幡蓋翻天。山水影疊。疑頗梨之壁画。華幢像写。誤瑠璃之樞華。上珠簾。瓔珞垂露。隨風乱転。排金扉。異香先薰。沈檀交芳。台布昔聞忍辱之宝衣。帳垂古求解脱之瓔珞。又並宝座。又重宝衣。莊嚴鑲七宝。光曜瑩鸞鏡。簫笛琴箏篴。奏樂雲上。琵琶鏡銅鑊。鎗曲於階下。苦無常音。大悲之淚先落。空非我調。実相之理漸顯。加之。徐步瑠璃之地。金繩界道。漸過栴檀之林。落花失路。行功德池浜。波唱苦空。至樂音樹下。風調常樂。從宮殿至宮殿。從林池至林池。或有說法集会之处。或有坐禪入室之处。或有伎樂詞詠之处。或有神通遊戲之处。宮殿樓閣。過過不尽。界道林池。行行無際。実浄土莊嚴。見見長今哉。心猶駐者。黄金樹林之暮色。淚不留者。上品蓮台之曉樂。凡見色聞声。皆見仏聞法之因縁。聞香嘗味。是発心修行之方便也。如是經歷。遂詣大宝宮殿。始拝弥陀如来▽

#### □和讃

○娑婆ヲ永ク別ツツ、初彼土ノ相ヲ見ル、瑠璃ノ池ニハ宝樹アリ、光リニ影モ耀ケリ、樹下ニハ天人「傍注「イ聖人」聖衆アリ、光「ハ華ニ映ジツツ」池「ノ畔ノ衆鳥ハ」音ヲ浪ニソ合タル、玉簾ヲ上ゲタレバ、瓔珞風ニゾ乱タル、金ノ樞<sup>トヒラ</sup>ヲ「排<sup>オシヒラ</sup>キ」、沈檀匂ヲ交

ヘタリ、台ニ忍辱衣敷キ、帳ニハ解脫ノ飴リ在リ、宝座宝衣悉ク、莊嚴七宝ヲ以テ成セリ、簫笛琴ト箏篳トヲ、雲上ニハ「傍注」イ間ニ」調レバ、琵琶鏡「銅」鉞ヲ又、階下ニハ合セケリ、「傍注」「モトニソ・ハセタル」、苦無常ノ音聞ハ、「大悲ノ涙先ツ落ちヌ、空非我ノ調ニハ、実相ノ理頭ハレヌ、瑠璃ノ宝池ヲ歩ニハ、金繩道ヲ界ツツ、栴檀樹林ヲ過ニハ、落花路ヲソ失ヘル、八功德池ノ波ノ音ト、苦空無我ヲ唱フレバ、樂音樹下ノ風ノ声ト、常樂我淨ヲ調ブナリ。『大要雜抄』付載和讃」

○宮殿番番多くして、瑠璃ノ樞に花ひらけ、樓閣重重かさなりて、瓔珞帳に露を垂、宮殿をゆけば宮殿有、林池をゆけば林池有、かくのごとく歴めぐるに、様々微妙の処あり、説法集会の場も有、入定坐禪の窓もあり、伎樂歌詠の台あり、神通遊戲の砌有、……台に忍辱の衣しき、帳に解脫の飾あり、宝座宝衣ことごとく、莊嚴七宝をもてなせり。（時宗本作和讃、極樂讃末）

○色を見声を聞も皆、見仏聞法縁をなし、香をかぎ味なむる事、発心修行の便也。（時宗本作和讃、迎接讃）

○宝樹宝池宝樓閣、見れ共見れ共としへに、長今なる莊嚴は、目しばらくも捨かたし。（時宗新作和讃、莊嚴淨土）

○樹下には天人聖衆あり、光花に映じつつ、池のほとりの衆鳥は、音を波にぞあはせたる、空殿をゆけば又宮殿、林池をゆけば又林池、かくのごとく経巡れば、さまざま微妙の処あり、説法集会の庭もあり、入定坐禪の窓もあり、伎樂歌詠の台あり、神通遊戲の所あり。（掌中和讃<sup>(四)</sup>）

○願ひの如く往く人の、心も殊に眺むれば、大宝蓮花のその上に、瑠璃の宝池を捧ぐれば、七宝の幡地<sup>はた</sup>をてらし、宝蓋虚空に翻へり、鳳の薨を連ねては、駕は瓦をならべたり、珠の簾を挑ぐるに、異る香まづ薰じ、台の上には忍辱<sup>にんじく</sup>の、衣を重ね帳には、解脫の玉を連ねたり、莊嚴奇珍鏤めて、光曜鸞鏡ひかり増し、聖衆伎樂の声澄みて、無明の眠も覚めにけり、しかのみならず徐に、行手の路を見渡せば、金繩道を境ひつつ、聖衆の経行絶間なし、栴檀林を過ぎゆけば、微風漸くおとづれて、梢の樂器おのづから、常樂我淨の響あり。……坐禪の床に入るあれば、神通遊戲に出づるあり。……すべて無辺の莊嚴は、行けども行けども際もなく、見れども見れども新なり。（淨土莊嚴和讃）

#### □伽陀・声歌

○玉ノスダレヲアゲタレバ、瓔珞風ニゾミダレタル、金ノトビヲラシヒラキ、沈檀ニホヒヲマジヘタリ。（金沢文庫保管『諸経要文伽陀集』中卷<sup>(五)</sup>）

○林池マタ林池、沈檀ノニホヒトコロドコロ、樓閣マタ樓閣、宝花ノイロ重々タリ。(往生講伽陀第五・鈔阿本伽陀集<sup>(59)</sup>)

○カノトコロノアリサマ、林池マタ樓閣、香花ニホヒヲマジヘタリ。(金沢文庫保管、声歌「春楊柳」)<sup>(2)</sup>

○宝幢宝台宝樓閣、光ヲ交テ照曜シ、宝雲宝花宝音楽、風ニシタガヒ乱転ス。(金沢文庫保管、舍利講伽陀・鈔阿本伽陀集<sup>(33)</sup>)

○カゼニタチヨルヲキノナミハ、カゼニタチヨルヲキノナミハ、苦空無常無我ノヒビキアリ、楽音樹ノ下ニイタレバ、風常ラクノミノリヲトク。(金沢文庫保管、声歌「太平樂急」)<sup>(24)</sup>

#### □宴曲

○終には楽音樹下の砌、功德池の波に声をあはせ、常樂我淨、苦空無我、内至檀波羅、屬提諸波羅蜜の、もろもろの徳をぞ備べき。

(拾葉抄「管絃曲」)<sup>(25)</sup>

○楽音樹下の砌には、風常樂を調べつつ、功德池の浪に和するは、赤白蓮花樂かとよ。(外物「声樂興」)

○鳧雁鴛鴦は、羽をかはして戯れ、苦空無我の響あれば、宝樹の梢にすみのぼる。(玉林苑上「永福寺勝景」)

#### □延年白拍子詞章

○金銀ルリノイサゴニハ、宝樹枝ヲゾツラネケル、車渠馬瑙ノトボソニハ、瓔珞露ヲゾフクミケル、何レモ妙ナル気色カナ、鳧雁鴛鴦ノサヘヅルコヘ、浪ノ音ニヤタグウラン、天人聖衆ノアソブ袖、花ノ色ニゾ似タリケル、宮殿樓閣サマザマニ、覺ヲナラベテツキモセズ、誠ニ淨土ノ莊嚴ハ、ミレドモミレドモメヅラナリ。(多武峰延年、連事、尋補陀落連事)<sup>(26)</sup>

#### □宝物集

○彼極樂世界の七宝の宮殿は、みれどもみれどもいやめづらかなる、金翅鳥のおもひをそむけり。(九冊本)

○鳧雁鴛鴦は遠近にむらがり、簫笛琴箏篳篥は、微妙のこゑを出し、琵琶繞銅鈸は、奇異のしらべをそうす、波の音、風の声は、みな仏道増進の妙文をとなへ、一切の草木は、ことごとく沈檀の匂ひをなせり。(九冊本)

#### □続教訓抄

○沈檀ノ異香国土ニニホヒ、凡ソ四天四方ニ色ヲミ声ヲキク、見仏聞法ノ因縁、香ヲカギ味ヲナムル、悉ク発心修行ノ方便ナリ、玉ノヤウラク露ヲタレテ、タカラノバンガイ、天ニヒルガヘル、極樂淨土ノ庄嚴ミレドモミレドモイヤメヅラニシテ、阿弥陀如来の

御音ハ、キケドモキケドモアコトナシ。(日本古典全集所収)

□物語

○くうでん、ろうかくは、すぎすぐれども、つきもせず、かいだう、はやしを、ゆけゆけども、きはもなし、おんがくのをと、てんにひびき、はた、けまん、やうらく、かかるところも、ありけるよと、くはんきのなみだ、いくばくぞや。(天狗の内裏)<sup>(7)</sup>

○あるいは坐禅入定の床もあり。(三人法師)

○七宝池蓮華開敷馨香芳烈。……諸天如雲集奏無量音樂。(妙本寺本『曾我物語』卷十、虎の浄土讃嘆)

(七)第六因円果満

△利他円満。證得菩提。謂奉仕弥陀。證不退位。請仏加被。先来此界。導結縁者。訪無縁者。▽

○弥陀如来に奉仕して、不退の位を証得し、仏の加被を蒙りて、有縁の衆生を導む。(時宗本作和讃、極楽讃末・掌中和讃)

△利他円満。證得菩提。……棹弘誓船。普濟四生之波浪。……四智鏡明。三身月円▽

○弥陀如来弘誓ノフネ、アマネク四生ノナミヲワタシ、利他円満證得ノ理、ツキニ三身ノ月ヲチギル。(往生講伽陀第六・釵阿本伽陀集<sup>(6)</sup>)

○禅林式のこと葉を題にて四十八首の歌よみけるに、弘誓の舟にさをさしてあまねく四生の波浪をわたらんといふことを、今は又ちかひの海のわたし守くるしき波に人はしづめじ(『新千載集』卷九、釈教歌、藤原為家)

○△況大智翼者。遙翔法性之空。大悲羽者。鎮布生死之泥▽

○子をおもふ雉も還りては、翅たかく法性の空にやかけらん。(拾葉抄「諏訪効驗」)

○我等定恵ノ翅、ニナガラ折レタリ。何レノ時カ翅ニ法性ノ空<sup>(28)</sup>。『地藏菩薩靈驗絵詞』忉利天付嘱事

(八)第七廻向功德

△謂生死有終。今生為穢土之終。菩提有始。後世為浄土之始▽

○生死ニヲハリアリ、今生ヲ穢土ノヲハリトシ、菩提ニハジメアリ、後世ヲ浄土ノハジメトセン。(『諸経要文伽陀集卷中』・魚山叢書所収伽陀集・聖宣本伽陀集・伽陀秘訣)

△抑我等從無始以來。流轉生死。于今不知出離方法▽

○流轉生死ノワレラガ、今マデ出離ノ縁ナキヲ、大悲誓願ヨニコヘテ、弥陀ハ来迎タレタマフ。(鈔阿本伽陀集(5))

△即成無辺功德。……廻向功德誠以莫大哉。……一座講演成就二世大願。……七門功德。……流轉生死。于今不知。出離方法▽

○ネカハクハ一座七門廻向ノマコト、功德無辺ノチカラヲモテ、カナラズ二世悉地成就ノ因、生死出離ノ縁トセム。(往生講伽陀第七・鈔阿本伽陀集(6))

△過去無量諸仏利益已漏。……是豈非大師釈尊之広大恩徳乎▽

○過去無量諸仏ノトコロ、ワレラスデニ利益ニモレタリトイヘドモ、滅度二千年ノノチ、大師サイワイニ恩徳ヲホドコスコトヲエタリ。(往生講伽陀第八)

○往生講の七門のころをよめる。発菩提心、梓弓そむく心を引とめてまことの道に思ひいるかな／懺悔業障、つくるすみくゆる思ひのふかければ今はわがみに露ものこらじ／随喜善根、うれしくも世々の契りのくちずしてかかる御法にけふはあひぬる／念仏往生、みだにのみ心をかけて紫の雲にのるみとなりにけるかな／讚嘆極楽、月のすむにしのみ国はことごとくたへなる法のこゑのみぞする／因円果満、いとひ出し猶ふる里へかへりきて今ぞあまねく人をみちびく／迎向功德、露ばかりつとむる法の光にてみなくらきよをてらせとぞ思ふ(閑谷和歌集<sup>(31)</sup>)

### (三) 梁塵秘抄今様・方丈記と往生講式

往生講式の式文と中世文芸との交渉の諸相は前項に示した通りであるが、このほかにも相互に影響関係の認められる作品がある。次に『梁塵秘抄』今様と『方丈記』を取上げて、往生講式享受の相を考察してみたいと思う。

『梁塵秘抄』巻二、法文歌二百二十首中の、極楽歌六首の中に次の今様がある。

こくらく浄土の宮殿は、るりのかはらをあをくふき、真珠のたるきをつくりなめ、めなうのとほそをしひらき。<sup>(32)</sup>

この今様について小西甚一『梁塵秘抄考』は、「極楽浄土の宮殿は、瑠璃の瓦を青く葺き、真珠の垂木を造り並め、瑠璃の扉を押し開き」と表記を改め、その典拠として、『仏説阿弥陀經』の「極楽国土有七宝池。八功德水充滿其中。池底純以金沙布地、四辺階道。金銀

瑠璃頗梨合成。上有樓閣。亦以金銀瑠璃頗梨車渠赤珠馬瑙而嚴飾之」の文をあげている。また、荒井源司『梁塵秘抄評釈』は、表記を『考』に倣い、「上に樓閣あり、又金、銀、瑠璃、玻璃、車渠、赤珠、瑪瑙を以て而も之を嚴飾せりとある句を、具体的に想像して作ったのであろう」と評し、『考』の掲げた典拠に、『栄花物語』音楽の巻を加えて、これを今様発想の原拠と推定している。また、志田延義『和漢朗詠集・梁塵秘抄』（日本古典文学大系）は、『宮殿』に「くでん」の読み仮名を補い、その補注で『仏説阿弥陀經』『栄花物語』のほかに『観無量寿經』を示してこれを原拠としている。また、新聞進一『梁塵秘抄』（日本古典文学全集）は、大系本の表記を踏襲するとともに、「經典のままの内容であるが、青、白、紅の色彩をとりまぜ、華麗さを視覚的に訴えた歌」と評している。さらに、榎克朗『梁塵秘抄』（新潮日本古典集成）の頭注は、この歌について、「極楽の莊嚴を詠じた歌。瓦、垂木、扉などの經文にない語をとり入れ、イメージを明確にした。青、白、赤と、色彩の対照もあざやか」という評を加えている。

さて、『梁塵秘抄』巻二、百七十八番の今様の典拠は、諸家の示した『仏説阿弥陀經』・『観無量寿經』・『栄花物語』と認めてよいのであろうか。わたくしは前項で示した諸例から推測して、この今様の典拠は往生講式の式文のうち、第五讃嘆極楽の段にみえる次の文であると考えたい（ここでは書き下し文に改めた）。

① 駕ノ瓦瑠璃ヲ並ベタリ。

② 華幢像写ツテ、瑠璃ノ樞ソニ華ルカト誤ツ、珠ノ簾ヲ上レバ、瓔珞露ヲ垂レテ、風ニ随ツテ乱転シ、金ノ扉ヲ排ケバ、異香先ヅ薫ジテ、沈檀芳ヲ交ヘタリ。

おそらく、今様の作者は、①の文を「瑠璃の瓦を青く葺き」と改め、②の文のうち、「珠ノ簾ヲ上レバ」を「真珠の簾を造り並め」と改め、さらに②の「金ノ扉ヲ排ケバ」の傍点部に、文中の「瑠璃ノ樞」をあてはめて一首を再構成したのではあるまいか。ただし、この推定は式文に「簾」とあるところを今様は「垂木」とし、また、式文に「瑠璃の樞」とあるところを今様は「めなうのとほそ」としている点で問題となろう。しかし、前者は、原文に変体仮名で「もゝとと書かれていた部分を「もゝとと読み誤ったということが考えられるし、後者は、式文に「瑪瑙の樞」と書かれていたものを転写の間に「瑠璃の樞」と誤写したと考えることができる。瑠璃と瑪瑙の草書体は誤りを起こしやすいからである。おそらく、この今様の製作時（嘉応元年以前）に作者が用いた式文には瑪瑙と書かれていたと推定される。とくに、前掲の多武峰延年詞章に「車渠馬瑙ノトボソニハ」とあり、また、秘抄今様百六番に「めなうのとほそををし

ひらき」とあるのは、右の推定を補強するものと思われる。以上のように考えると、從來なんの疑問もなく表記されてきた真珠の垂木は再考を要することになる。すなわち、真珠を糸に連ねて作った簾は理解することができても、真珠で出来た垂木（屋根の裏板などを支えて、軒から軒へ渡す長い木材）はとうてい理解することができないからである。よって百七十八番の今様は、「極楽浄土ごくらくじょうどの宮殿は、瑠璃るりの瓦かはらを青く葺あそき、真珠すたれの簾つぐなを造り並なめ、瑠璃るりの樞とほそを排をき」と表記し、その典拠を往生講式の式文に求めるのが至当かと考える。

次に『方丈記』の末尾には、

夫三界ハ只心ヒトツナリ、心若ヤスカラスハ、象馬七珍モヨシナク、宮殿樓閣モノソミナシ、今サヒシキスマヒ、ヒトマノイホリ、ミツカラコレヲ愛ス。（大福光寺本方丈記）

という文がある。この文のうち「宮殿樓閣モノソミナシ」についての主要な注解と口訳を示すと、築瀬一雄『方丈記全注釈』は、語釈で「樓閣はたかどのであり、あわせて、立派な邸宅と見ればよい」とし、口訳で「宮殿や樓閣のような立派な建物も、あっても仕方がない」とする。また、富倉徳次郎・貴志正造『方丈記・徒然草』（鑑賞日本古典文学第十八巻）は、「りっぱな宮殿や樓閣もほしくはない」と訳し、三木紀人『方丈記・徒然草』（鑑賞日本の古典10）は、「豪華な住居の例」と語釈して「宮殿、樓閣もまた意に満たない」と口訳し、それぞれ「宮殿、樓閣」を一般語と理解して、これに仏教的な意味を与えていない。しかし、この言葉は「象馬七珍」と対句になる仏教語と解することができるのであつて、単に「立派な邸宅」の意味に取つては長明の真意に遠ざかることになる。

おそらくここに言う宮殿樓閣とは、往生講式の式文第五、讚嘆極楽の段に、「宮殿万万、樓閣重重」「從宮殿至宮殿」「詣大宝宮殿」と繰返し表現している不退の浄土にある宮殿や樓閣を念頭に置いた言葉とみるべきであり、この部分は、「宮殿樓閣の聳える極楽浄土に往生するという希望は持てない」と訳すのが妥当と考えられる。

一方、長明は『発心集』巻五「貧男好差図事」の条で、他人から紙反古を乞い集め、それに家の設計図を書いて、家の建築の計画ばかりをしていた貧しい男の行動を描き、男の行為を良しとしながらも、一方で、

況や、よしなくあらましにむなしく一期をつくさんよりも、ねがはば必ず得つべき安養世界の快樂、不退なる宮殿樓閣を望めかし。と評している。この末尾の評語は、前掲の『方丈記』の文と密接につながるものであつて、おそらく長明は、『方丈記』に「宮殿樓閣モノゾミナシ」と記するにあたって『発心集』の「不退なる宮殿樓閣」と同じ意味の言葉を想起したはずである。きわめて短かい言葉で



はあるが、そこに長明の往生講式受容の一端をかいまみることができる。

#### (四) むすび

永観律師製作の往生講式は、貴顕の邸宅で催された阿弥陀講あるいは往生講の場で読誦されたが、その式文は内容の秀逸典雅のゆえに後世の文学に多大の影響を及ぼした。前項には往生講式の式文を典拠とする作品を煩をいとわず掲出したが、終りにそれぞれの作品を整理してこの論のむすびとしたい。

△金沢文庫保管歌謡資料▽往生講伽陀(訓伽陀)・釵阿本伽陀集・諸經要文伽陀集・聖宣本伽陀集・伽陀秘訣・大要雜抄付載和讃・声

歌「春楊柳」「太平楽」

△和讃▽時宗本作和讃(迎接・滅罪・無常・心品・恩徳・極楽)・同新作和讃(莊嚴浄土)・浄土莊嚴和讃・掌中和讃

△今様▽唯心房集・梁塵秘抄

△宴曲▽朝・無常・浄土宗・管絃曲・諏訪効驗・永福寺勝景・声楽興・余波

△謡曲▽歌占・阿漕・東岸居士・善知鳥

△和歌▽新千載集・閑月和歌集・閑谷和歌集・中院詠草・隆房集・山家集

△仏教説話集▽宝物集・撰集抄・雑談集・地藏菩薩靈驗絵詞

△法語▽愚迷発心集・観心略要集・元久法語

△唱導資料▽餓鹿因縁

△物語▽平家物語・天狗の内裏・三人法師・西行物語・曾我物語

△随筆▽方丈記・徒然草

右のうち、歌謡では金沢文庫保管「大要雜抄」付載和讃がその典拠をすべて往生講式に求めていることが注目される。とくに、「樹下ニハ天人聖衆アリ、光□池□音ヲ浪ニソ合タル」は欠損部が多くて解読困難であったが、式文からの類推、また、『掌中和讃』の「樹下には天人聖衆あり、光花に映じつつ、池のほとりの衆鳥は、音を波にぞあはせたる」の文の類推により、「樹下ニハ天人聖衆アリ、光ハ

華ニ映ジツツ、池ノ畔<sup>ホトリ</sup>ノ衆鳥ハ、音ヲ浪ニゾ合<sup>アハセ</sup>タル」と読むことができたのはきわめて意義深い。前稿の「往生講式と仏教歌謡」で、第三句を「池ノ鳧雁鴛鴦ハ」と当てたが、ここに訂正したいと思う。また『掌中和讃』は、作者も製作年代も不明なものとされて、従来から『浄業和讃』との関連だけが指摘されてきたものである。<sup>(33)</sup>しかし前項の考察によって、この和讃が「大要雑抄」付載和讃の一部を撰取していることが明らかになった。この点は「大要雑抄」付載和讃の広範な流布を予想させるもので、『掌中和讃』の存在意義はきわめて大きい。また、時宗の和讃の中に往生講式の式文を引くものも多くあるが、この点もこれまで和讃史研究の上で特に取り上げられたことはなく、時宗和讃の解明に資するところがきわめて大きいと考えられる。

〔注〕

- (1) 『拾芥抄』 齋日月部第十三。
- (2) 『新潮日本古典集成』の頭注には「拾遺往生伝」を引用していないが、両書は密接な関係がある。
- (3) 『続群書類従』公事部第五所収。
- (4) 『史料大成』所収『兵範記』による。
- (5) 岩田宗一「講式と雅楽―妙音天講式を中心として―」(『雅楽界』56号)
- (6) 『大日本史料』第三編之十二による。
- (7) 『古代中世芸術論』(日本思想大系23) 所収「教訓抄」による。
- (8) 『金沢文庫研究』274号(昭和六十年三月)
- (9) 『金沢文庫資料全書』第七卷「歌謡声明篇」伽陀部四―(6)所収。以下同じ。
- (10) 西尾光一校注『撰集抄』(岩波文庫) 以下同じ。
- (11) 『日本歌謡集成』巻四所収。
- (12) 『金沢文庫資料全書』第七卷「歌謡声明篇」讃嘆・和讃部二―(2)所収。
- (13) 武石彰夫編『仏教歌謡集成』所収。
- (14) 時宗本作和讃の心品讃、唯心房集今様、観心略要集ともに、宝物集からの引用とも考えられる。

(15)『私歌集大成』中世Ⅰ所収。

(16)『往生要集』巻中、大文第五、懺悔衆罪に、「懺悔非一。隨業修之。或五体投地。遍身流汗。歸命弥陀仏。念眉間白毫相。発露涕泣。応作此念」とある。

(17)『金沢文庫資料全書』第七巻／歌謡声明篇／伽陀部二所収。

(18)『往生要集』巻中、大文第六、臨終行儀に、「然阿弥陀仏。有不思議威力。若一心称名。念々中。滅八十億劫。生死重罪」とある。

(19)『往生要集』巻上、大文第二、欣求浄土に、「樓殿林池。表裏照曜。鳧雁鴛鴦。遠近群飛」とある。

(20)『日本歌謡集成』巻四所収。両者その歌詞が類似していることから「掌中和讃」は「大要雑抄」付載和讃を引用したものと考えられる。

(21)『金沢文庫資料全書』第七巻／歌謡声明篇／伽陀部一所収。

(22)同右、声歌部三―(6)所収。

(23)同右、伽陀部四―(9)所収。

(24)同右、声歌部三―(13)所収。

(25)『往生要集』巻上、大文第二、欣求浄土に、「八功德水。充滿其中。微瀾廻流。転相灌注。安詳徐逝。不遲不疾。其声微妙。無不仏法。或演説苦空無我。諸波羅蜜」とあり、また『観無量寿経』には「其摩尼水。流注華間。尋樹上下。其声微妙。演説苦空無常無我諸波羅蜜」とある。

(26)『統日本歌謡集成』巻二所収。

(27)横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第九所収の丹緑本による。

(28)教王護国寺観智院蔵

(29)『金沢文庫資料全書』第八巻／歌謡声明篇／伽陀部(統)所収。

(30)「願以一座七門、廻向之誠、功德無辺之力、必為二世悉地成就之因、生死出離之縁」と漢文体で表記されている。

(31)『私歌集大成』中世Ⅰ所収。

(32)天理図書館蔵竹柏園本『梁塵秘抄』による。

(33)多屋頼俊『和讃史概説』第三章「鎌倉室町時代の和讃」参照。

(本学教授)